音楽科に於ける基礎能力を高めるための総合的な指導計画について

佐　伯　正　一

1. 題目設定

私達は最も身近かな問題として学習困難点の分析と対策の研究に取りくんできたのである。別紙発表の学習困難点の内容は，今後また変ってくるであろうし，また他校で作った場合は，その内容がちがったものになるであろうと思われるが，本校における現在の段階ではこのようになっていることを，御了承いただきたい。

この困難点を解決するために，直接生徒に指導してきたが，歌唱の困難点は，歌唱だけで解決できないことを知った。また音楽の理解をさらに深めるには，器楽，創作，鑑賞などの他の領域と合わせて指導することの方が容易であることを知った。

一般の生徒は恵まれた音楽的環境にあるわけでもなく，ただ週2時間の授業だけで音楽能力をのばしてやらなければならないのである。

このことから指導態度を各領域の総合的なものに結びつけて考えていかねばならないことを強く考える次第である。

2. 研究経過

まず，文部省の新指導要領に示している領域内の基礎能力が，他の領域との関係を調べ，その領域でしか指導できない能力と，他の領域との関連において指導を深めるものなどを，指導者が予め把握しておくことは，総合的な指導計画に，また指導態度に重要なことであると感じたので，次のように整理してみたのである。

しかし音楽の能力は，その根本において一体のものであるので，完全には分離して考えられない点が多いが，学習作業の面で便宜上次のように分けて能力の関連性を考えてみたわけである。

次の表の基礎能力の種類というのは，文部省の新指導要領の中の主なものを取り上げたのである。

また，各領域の関連性と独自性というのは，その能力が，他の領域と関係なく，その領域内だけで育てられるものであるかということを示している。例えば，領域の一個は独自性で，二個以上はその関連性を示すものである。

基礎能力の種類	各領域の関連性と独自性
歌　唱	
姿勢，呼吸法，発声法	歌唱
発音	歌唱，鑑賞
リズムにのった歌い方	歌唱，鑑賞，器楽
記号，標語	知的理解，表現，鑑賞
指揮への順応	歌唱，器楽，鑑賞
終止形合唱，対位的合唱	知的理解，表現，鑑賞
視唱力	知的理解，表現
器　楽	
楽器操作	器楽
呼吸法	器楽，歌唱
合奏の技術	器楽，歌唱
フレージング	表現，鑑賞
指揮への順応	器楽，歌唱，鑑賞
視奏力	知的理解，表現
創　作	
自由に旋律を歌い出す	創作
旋線律，リズム，段落などの感じの違いの理解	知的理解，表現，鑑賞
旋律のつづり方	知的理解，表現
旋律のまとまり	知的理解，表現，鑑賞
形式や和声をもとに旋律を作る	知的理解，表現
感じに合う，記号や標語の使い方	知的理解，表現，鑑賞
旋律と伴奏	〃
鑑　賞	
聞きとり	表現，鑑賞
声や楽器の種類	知的理解，鑑賞
演奏形態のちがい	〃
標題音楽と純音楽の聞きとり	鑑賞
主旋律と伴奏	表現，鑑賞
各パートの分担	〃
リズム，旋律，和声の各要素の分担	〃
色彩的声部	鑑賞
楽式構造	知的理解，表現，鑑賞
音楽の時代的特徴	知的理解，鑑賞
民族的特徴	知的理解，表現，鑑賞

以上の表でわかるように，一つの基礎能力はいくつかの領域と複雑にからみあっているので領域毎に解決できないむずかしさも，ここにあることを考え，総合的な計画や指導の重要さを痛感するわけである。

基礎能力を育てるためには，音楽を表現すること，鑑賞すること，そのものにあることは，いうまでもないが，他面，その能力の基礎技術（例えば視唱，聴音など）を系統的に指導することが必要である。

いずれにしても，これらの基本能力は，基礎音感という言葉で表わすことが適当であるか，どうかわからないが，いわゆる，音高感，リズム感，拍子感，和声感，旋律感，調性感，和声感，速度感，強弱感，音色感など，音楽のもついろいろな音感覚について，音楽的に育てていかなければならない。

中でも，音高感，リズム感，拍子感，和声感，旋律感，調性感，和声感などは直接楽譜と密接に結びついているのであるから，前に述べたいくつかの音感覚も，指導上の立場から，次の三つの作業に要約できるのではないかと思われる。

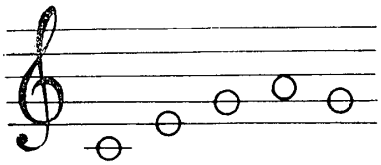
1. 聞き分ける力
2. 譜を音にする力
3. 音を譜にする力

聞き分ける力の中には，直接音感覚だけによるものと，楽譜と結びついているものとがある。前者には，速度感や強弱感，音色感などがあり，後者には，その他の音感覚がすべて含まれる。

また，譜を音にする力には，視唱，視奏などが含まれ，音を譜にする力には，聴音や創作などがある。

次に中学1年生全員に対して，入学直後，小学校における音楽の能力は，どんな程度であるかを調査した。その中から参考になるものをあげて考えてみたい。

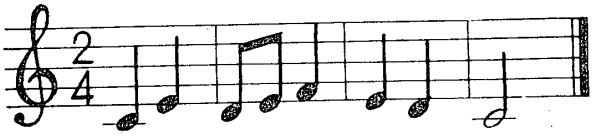
まず音高感について右の楽譜の音をピアノでゆっくり3回ひいて，それを書き取らせたのであるが，正答率は全体の46%（男子中41%，女子中51%）である。この数字は高いとはいえない。しかも音高感がわかっていて，記譜力の不足によるものとは考えられない。まさしく音高感のみによる数字であろう。



リズム感について右のリズムをピアノで3回ひいたものを書き取らせたのである。この場合，音符の表わし方の不確実な者があっては，正しいリズム感の調査にならないので，十分の準備を与えて調査したものである。その結果，正答率は全体の53%（男子中47%，女子中59%）である。

これもリズム感を把握している正真正銘の数字である。これを音符の1拍や半拍を理論的に理解していても，音として音楽のリズムとして理解していないところに原因があるのではないか。

旋律聴音について



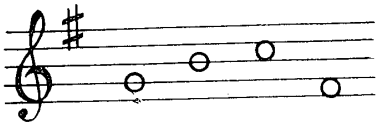
上の旋律をピアノでゆっくり4回ひいたものを書き取らせたのであるが，正答率は全体の19.5%（男子中12%，女子中29%）という低調さである。これは，記譜力の未熟や音高とリズムの組み合わせによる複雑さによるものと思うが，何よりも学習経験がないことが最大原因ではなかろうか。

以上の調査と同種のものを，一年後の者に行った結果は，

音高感（前よりもむずかしいもの）	正答率は	84%
リズム感（前と同じもの）	〃	64%
旋律聴音（　〃　）	〃	74%

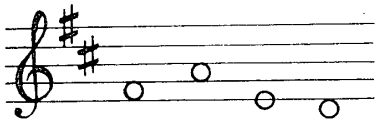
この一年間を特に，この種の授業に主眼をおいたわけでもなく，普通の授業を行いながら，経験をさせながら，総合的な指導態度をとってきた。広い範囲にわたった多くの音楽の学習経験をさせることが大切であると痛感した。

なお，入学当時の調査として，調の階名も行った結果，次の調の階名を答えられた者の正答率をあげてみると，

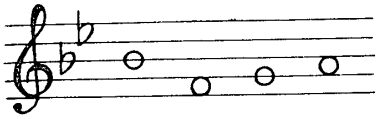


67.5%

71.3%



41.4%



25.3%

これは，知的理解，つまり階名読みとしての調査で

あって音としての理論を含んでいないことをお断りしておきたい。

3. 結　　論

この度の新指導要領に示すところの基礎能力はこれを高めるために，研究経過で述べた基礎音感を高めることと，大きな関係があり，またそれが，聞き分ける，音を譜にし，譜を音にする三つの学習が総合的に結びついて，その効果があがることを体験したのである。つまり，三つの学習は，音楽学習の全般にわたって常にその基をなし，しかも，総合的に働きかけているものでなければならない。しかし，三つの学習は，同じ比重であるものではなくて，単元や目標に応じて，その比重は異なることは同然である。

換言すれば，三つの総合的な学習を通じて，音楽学習を高めるとともに，他面，基礎能力をも育てていく学習が望ましいと思っている。

この研究題目は，基礎能力を高めるための総合的な指導計画とするよりも，私の基礎能力を高めるための総合的な指導態度とした方が適切であったかもしれないと思っている。